

第2学年国語科学習指導案

日時：2026年1月29日（木）

対象学年 2年生全学級 140名

授業者：阿部 由美

1. 単元名 宗教画を読む～絵画から情報を読み取ろう～

2. 単元の目標

- ①宗教画とは何かを知る。
- ②聖書の章句を読んでから絵画に向き合い、絵画に込められた情報を読み取る。

3. 指導観

単元観と教材観

光村図書の国語2には『君は「最後の晩餐」を知っているか』と『「最後の晩餐」の新しさ』という文章が掲載されている。ふたつの作品を読んで、専門家によるダヴィンチ絵画のへの賞賛のポイントを比較する授業は勿論有意義だが、その比較に入る前に、ヨーロッパの教会の壁面にぐると宗教画が飾られている理由や、聖書のどの章句をダヴィンチが絵画として再現したのかを知り、絵画そのものに向き合う時間をとることで、2編の評論文に書かれている内容の解像度があがるのではないかと考え、聖書の当該箇所を読んでレオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」の絵からイスカリオテのユダを探すという時間を設けた。

4. 単元指導計画（全3時）

時	学習内容・学習活動	指導上の留意点
第1時 第2時	・『聖書』とは何かを知る。 （記載言語やかつての識字率などの歴史に触れる） ・ヨーロッパの教会の内部には宗教画があり、様々な画家が同じ主題で描いたそれらの絵が聖書を読めない人のための物でもあったことを知る。 ・資料として配布した『新約聖書』の当該箇所（マタイ福音書 26.17～25・マルコ福音書 14.12～21・ルカ福音書 22.7～23・ヨハネ福音書 13.21～30）を読む。 ・ワークシートに載っているダヴィンチの「最後の晩餐」、あるいは教科書の写真を見ながら聖書の内容と比較して「ユダ」を探す。 ・授業の最後に自分たちのグループが選んだ「ユダ」を選んだ理由と共にクラスで共有する。	・聖書は宗教の正典ではあるが、ここでは絵画の主題であり、物語として扱う。 ・同じ聖書に記載されている出来事でも福音書によって書かれていることが違うことに気づかせる。 ・活動はグループで行わせる。

第3時	・教科書の本文『君は「最後の晚餐」を知っているか』と『「最後の晚餐」の新しさ』を読み、2作品の主張の比較を行う。 ・ワークシートに以下の観点で表を作り、提出する。 ①筆者の着眼点。 ②筆者が「最後の晚餐」を評した言葉。 ③評した言葉の理由。 ④「最後の晚餐」の新しさとはなにか。	・グループで相談してもよいこととし、まとめるための観点を示す。
-----	--	---

成果と所感

生徒は授業者が想定した以上にイスカリオテのユダ探しに夢中になって取り組んでいた。絵画に描かれたイエスを含む13人をじっくりと見て、度々聖書の章句に戻り、人物をじっくりと見定めて人数を絞っていき、9割のグループがユダを特定することができた。そればかりか、聖書の章句を読んで別の人物まで言い当てようとしたグループもあった。イエスの手、ユダの手、テーブルの上に描かれた食事まで丁寧に観察することができた。

この活動を踏まえて2つの評論を読ませたことで、生徒は、特に『「最後の晚餐」の新しさ』に示された3つの「最後の晚餐」についてもよく観察した。特に印象的だったのは子どもたちが「サンタポリナーレのモザイク画の「最後の晚餐」はまるで人が横たわって食事をしているようだ」と机をテーブルに見立てて身体を使って再現を行ったことだ。そこから「シンポジオン」という晚餐のスタイルに言及することもできた。そこから、生徒は「最後の晚餐」は同じ聖書の章句から主題を得ているにもかかわらず、聖書に記された当時の「食事の様子」の再現ではなく、その絵を描いた（作品を作った）時代の人にとっての一般的な「食事の様子」が作品として再現されていることに気がついた。

文章と絵画の往還を経て何度も文章（聖書）を読み、絵画（ダヴィンチの最後の晚餐）をじっくりと観察し、文章同士（本文の2作品）の比較を行い、同じ主題の絵画（本文掲載の3作品）を見比べることで、生徒は自分たちならではの発見を述べ、本文のみならず周辺事項を新たな知識として獲得することができたように感じる。